

## 認知症サポーター育成プログラム ―第一報―

木村 孝子, 小楠 範子, 徳永 龍子

### 要 旨

本報告は文部科学省の現代的教育ニーズ補助事業に採択された取り組みの第一報である。認知症サポーターを育成するために全国の大学でも初めての取り組みと言える「認知症援助論」「認知症援助論実習」の科目を立ち上げ、カリキュラムの中に位置付けた。受講学生は全学科の学生が対象であり、この科目には全学科の教員の協力があつた。

科目構成がスムーズに行つた背景には、本学のキリスト教的ヒューマニズムに基づく、人間教養科目の存在がある。これらがベースにあることで、新しい科目構築と位置づけが明確になった。第一回の受講生の属性、背景から、認知症援助論、認知症援助論実習のサポーター育成効果を振り返る。

**キーワード：**認知症援助論、認知症援助論実習、認知症サポーター

### I. はじめに

本報告は平成 19 年度文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択された事業の一環の第一段階である科目の立ち上げについてである。テーマは“認知症教育を通した人づくり・町づくり”として認知症サポーターの育成プログラムを立ち上げた。このプログラムは 2 つの科目「認知症援助論」「認知症援助論実習」から成り、講義、演習、実習で構成される。

講義・演習を担当する教員は 4 学科の教員がそれぞれの専門性を生かして実施する。受講対象者は全学科の学生である。

本学が位置する S 市は平成 17 年度調査で 25.6% の高齢化率である。徘徊老人の行方不明者広報も多い。鹿児島県では在宅で生活する高齢者の 5 割に、施設で生活する高齢者の約 9 割に認知症症状が認められる。鹿児島県内の一般世帯に占める高齢単身世帯の割合は平成 17 年

度で 14.1%、全国平均の約 2 倍である。高齢者夫婦の世帯の割合は 13.9%( 全国平均は 9.6%) である。高齢者が認知症を持ちながら地域の中で生活していくためには、地域住民の認知症に対する理解とサポートが欠かせない。

### II. 「認知症援助論」科目の構成 (表 1)

#### 1. 育てる人材像について

認知症の高齢者の真の幸せのために学生が持っている能力を生かしながら認知症の高齢者の尊厳を尊重してかかわることのできる。そのために学生は講義を受け、演習を行い、実践への足懸かりとすることができるようプログラムを構成した。

やさしさと知識、実践力を備えた学生は、高齢者のニーズを見極め、できる部分は見守り、必要な時に必要な手助けができる。すなわち責任を伴ったやさしさのある学生である。

認知症の人の立場に立つことはできないが同じような状況を考え、状況設定し、その支援を必要としている部分を見出していった。

そのために他者とのかわり方や認知症の方の気持ちを理解できるようロールプレイを取り入れ相互に全員が何回も演習した。そのことで多くの気づきと認知症の方と話をする意欲が生まれた。

更に、こどもを対象として認知症教育を実践できるように認知症教育の教材づくりと実践に向けて模擬授業を各グループが実施した。このような授業と演習を繰り返す中で、学生はそれまであやふやであった自己の知識と向き合い不確かな部分を克服すべく主体的に学習している。

## 2. 指導教員について

平成 19 年度は全学部の教員が担当した。平成 20 年度は看護栄養学部の教員で担当した。

## Ⅲ. 「認知症援助論実習」体制（表 2）

実習の狙いとしては、認知症に対する理解を深め、必要な時に手助けができるとした。

この科目受講条件として、「認知症援助論」の講義を受講済みの学生とした。又、オリエン

テーションの参加は必須とした。

## 1. 実習配置, 実習日数, 実習時期

学生は 5 名以下のグループとし、10 か所のグループホーム、デイサービスセンター、介護特別養護老人ホームで 5 日間の実習を行った。実習時期は「認知症援助論」の講義が終了した後、看護学科の学生の実習と重ならない時期とした。各学科によりスケジュールが異なるため夏季・春季休暇を利用した実習となった。

## 2. 教員の指導体制

実習指導については看護学科の教員が毎日 2～3 か所を担当し、巡回指導をする形となった。朝の計画、実施指導、カンファレンスへの参加指導である。

## 3. 実習内容

施設でのオリエンテーションを受け、施設入所の認知症の方や介護サービス利用者の方とコミュニケーションをとり、触れ合う中でケアの実際を学ぶ。学生は実習の前にその日の計画を立て、その計画にそって実習する。毎日カンファレンスを行いグループで振り返りをする。そしてその日の印象に残ったこと等を実習日誌

表 1 認知症援助論展開計画

| 回  | 授 業 テ ー マ                                  |
|----|--|
| 1  | オリエンテーション、認知症サポーターとは、ボランティアとは、アンケート        |
| 2  | 老いとは・認知症とは(中核症状・周辺症状)                      |
| 3  | 認知症を持つ人の気持ち・家族の気持ち①-私を理解して下さい              |
| 4  | 認知症を持つ人の気持ち・家族の気持ち②-尊厳を支えるために              |
| 5  | グループワーク、ロールプレイ                             |
| 6  | グループでのロールプレイ、ロールプレイ                        |
| 7  | 高齢者の食生活                                    |
| 8  | 生活機能とかかわり方①-最後まで自分らしく生きるために                |
| 9  | 生活機能とかかわり方②-最後まで自分らしく生きるために関係機関とのネットワークづくり |
| 10 | 児童・生徒に向けた教材作り                              |
| 11 | 児童・生徒に向けた教材作りと実践に向けて                       |
| 12 | 指導案・教材づくり(グループワーク)                         |
| 13 | 指導案・教材づくり(グループワーク)                         |
| 14 | 模擬授業の発表                                    |
| 15 | 模擬授業の発表とまとめ                                |

に記載する。最終日の午後は実習のまとめを行い、グループごとに各自の学びを発表する。

IV. 受講学生の基本属性

1. 受講学生の学科、学年

受講対象は全学科の学生である。年度途中の開講のため、科目開講通知は掲示板等を用いて行った。この時の学科学生は表3の通りである。

受講者を学科別にみると健康栄養学科が最も多かった。学年別では3年生が最も多く次いで2年生、1年生の順であった。

3年生が多いということはすでに基礎的な科目がほぼ終了した上で、認知症援助論を受講しており、このことは科目内容の理解、指導案作成、認知症援助論実習への展開をスムーズにし

た要因の一つと言える。

2. 受講学生の高齢者、認知症者との関わり頻度

表4からみると受講学生の68%が高齢者との同居経験がない。さらに認知症者と接したことが無いものは46%となっている。このことは講義内容の理解、実習への導入を具体的に展開する必要性となっている。

3. 受講動機について

受講動機については、認知症に興味があったから78.5%、就職に有利だと思ったから38.5%という理由が挙げられている。その他は表6に示すとおりである。

表2 認知症援助論実習展開計画

| 回   | 実 習 内 容  |
|-----|--|
| 1日目 | オリエンテーション(学内・施設)                                       |
| 2日目 | 施設入所の認知症の方やデイサービス利用の認知症の方とコミュニケーションを図り、触れ合う中でケアの実感を学ぶ。 |
| 3日目 | "  |
| 4日目 | "  |
| 5日目 | " /<br>PM 反省会・まとめ、修了証・オレンジリングの授与                       |

表3 「認知症援助論」受講学生の所属・学年

|      | 選 択 肢         | 受講学生 n=65 |
|------|---------------|-----------|
| 所属学科 | 英語コミュニケーション学科 | 7(10.8%)  |
|      | こども学科         | 0 (0.0%)  |
|      | 健康栄養学科        | 51(78.5%) |
|      | 看護学科          | 7(10.8%)  |
| 学年   | 1年生           | 14(21.5%) |
|      | 2年生           | 24(36.9%) |
|      | 3年生           | 27(41.5%) |
|      | 4年生           | 0 (0.0%)  |
| 年齢   | 18歳           | 7(10.8%)  |
|      | 19歳           | 17(26.2%) |
|      | 20歳           | 17(26.2%) |
|      | 21歳           | 22(33.8%) |
|      | 22歳           | 1 (1.5%)  |
|      | 23歳以上         | 1 (1.5%)  |

### V. 講義と実習の展開の実際

認知症援助論の展開は表1の通りである。認知症援助論の講義開始に当たっては科目担当者会議を開き、科目の狙い、各講義時間のテーマ内容の共有化、講義間の関連性など認識の共有化を図った。そしてロールプレイ、指導案作成演習時は担当以外の教員もできるだけ各グループ指導に入るようにした。

各講義内容については各担当教員が原案を作成し、協議する形をとった。疾患について全く予備知識の無い学生が多い中、人体モデル(脳)の提示やスライドで視覚に訴える教材、人との関わりなどの現象面についてはVTRの視聴など、さらに指導案作成については、前提となる講義内容の理解無しでは成立しないため、各グループ編成をし、テーマ設定後、教員が分担指

表4 受講学生の実環境因子

| 設 問                  | 選 択 肢  | 受講学生 n=65   |
|----------------------|--|---|
| 祖父母との同居経験の有無         | 同居の経験はまったくない<br>過去に同居していた<br>現在、同居している                                     | 44(67.7%)<br>17(26.2%)<br>4 (6.2%)                          |
| 認知症の人と身近に接した経験の有無    | 全く接したことがない<br>家族の中で接した経験がある<br>ボランティアで接した経験がある<br>町の中で偶然に接した経験がある<br>病院・施設 | 30(46.2%)<br>14(21.5%)<br>4 (6.2%)<br>4 (6.2%)<br>13(20.0%) |
| 老人ホームなどでのボランティア経験の有無 | 経験がない<br>経験がある<br>無回答  | 41(63.1%)<br>23(35.4%)<br>1 (1.5%)                          |

表5 受講学生の受講動機

| 設 問              | 選 択 肢   | 受講学生 n=65   |
|------------------|---|---|
| この講義を受講しようと思った理由 | 就職に有利だと思ったから<br>友人にさそわれたから<br>ボランティアをやってみたかったから<br>認知症に興味があったから<br>家族に認知症の人がいたから<br>単位がとれるから<br>何となくおもしろそうだったから<br>その他<br>無回答 | 25(38.5%)<br>6 (9.2%)<br>11(16.9%)<br>51(78.5%)<br>10(15.4%)<br>5 (7.7%)<br>4 (6.2%)<br>11(16.9%)<br>1 (1.5%) |

表6 受講学生の受講動機

| 設問9 この講義を受講しようと思った理由「その他」の内容 (受講学生 n=11)   |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 将来家族の介護時に役立つと思ったから</li> <li>・ 病院などに就職したとき役立つと思ったから</li> <li>・ 親戚に認知症の人がいてそれが原因で亡くなった</li> <li>・ 将来役に立ちそうだったから</li> <li>・ 家族や身の回りの人でこれから認知症の人と出会うかもしれないから</li> <li>・ 家族のためになると思ったから</li> <li>・ 祖父母や両親が認知症にならないとは限らないから</li> <li>・ もし家族が認知症になったときどのように対応したらよいのかと思ったから</li> <li>・ 祖父母や身近な人が認知症になった場合にちゃんとしたサポートをしたいと思ったから</li> <li>・ 将来もし家族の中で認知症にかかったら大変だからこの機会に学んでおこうと思った</li> </ul> |

導した。学生は講義時間だけではならず、空き時間を活用し、指導案を完成していった。

認知症援助論実習については講義内容を理解した上で、人と接する、コミュニケーションがとれることが第一歩である。認知症高齢者とのコミュニケーションについては教員は慎重に学生と認知症高齢者との関わりを見守っていたが、学生の誠実な対応ややさしさは高齢者に伝わっていったようであった。

実習に入る前に実習場の選択があった。認知症についての予備知識は講義で受講したことのみである学生たちは認知症者とのかわりでは、各施設スタッフの関わり方が即、モデルになってしまう。その為、大学の実習目的に合う施設を選択し、尚、実習前の打ち合わせを綿密に行った。これらのことで、学生が実習に躓くことなく無事に目標達成し、修了することができた。

## VI. おわりに

認知症サポーター育成というプログラムを大学の科目で立ち上げ、カリキュラムに位置付けたことは全国の大学でも例がなく、当大学の取り組みが真に現代的ニーズに応え得る画期的な取り組みと言える。現在の認知症高齢者の増加傾向は平均寿命の延びとともにある。このことから、一人でも多くの人が認知症を知り、その予防に取り組み、認知症者に適切な対応ができる、安心して住める町づくりに貢献することができる。

当大学のキリスト教的人間観に基づき人間理解のための科目を修めながら、学生は人間とはどのような存在なのか、思考し、実習していった。実習指導をする中で、教員も多くを学ばせて頂いたが、ひとつの例をあげると、講義（知識）と実際のギャップに気付けるということであろうか。実習初日は学生の戸惑いの顔で始ま

るといっても過言ではない。講義を聞いてよく理解できていた自分が、実際の現場に来ると何もわかっていない、何もできないと気付くのである。人と接するのは簡単であると認識していた自分の認識を修正せざるを得ない。しかし、そこから学生の自己洞察が深くなり、一見、悩みぬいているようであるが、実習終了時には、確かな手ごたえとして、自信になりつつあるように見受ける。実習反省会ではその学びの深さに驚くとともに嬉しく感じる。彼女たちの持つ優しさや誠実さ、前向きな姿勢は今後の可能性をも示唆していて頼もしい。

女子大学生は卒業後、家庭にあっても職場にあってもその学びを如何なく発揮できる。全国どこでも認知症サポーターは必要とされている。彼女たちの活躍を願ってやまない。そしてボランティアのやさしさの網の目を紡いでいてほしい。

## 謝 辞

認知症サポーターを育成することは、現代社会の大きなニーズであると言える。これらの事業を可能にしたのは文部科学省の補助事業であったからであるが、当大学の大きな協力があり、各関係教員の協力があったから実現したことであった。心から御礼を申し上げたい。

## 参考文献

- 1) 山梨恵子：我が国における認知症ケアの実情と課題、第一版、ニッセイ基礎研所報、48：67-92
- 2) 長谷川 和夫：認知症診療のこれまでとこれから、第一版、永井書店、東京、2006
- 3) 小野寺敦志：事例で学ぶ新しい認知症介護、第一版、中央法規、東京、2008
- 4) 国際老年精神医学会：痴呆の行動と心理症状、第一版、アルタ出版株式会社、東京、

2005

- 5) 中村重信：認知症治療の最前線. 第一版, メディカルレビュー社, 大阪, 2008
- 6) 厚生統計協会：国民の福祉の動向. 東京, 2008

- 7) 矢富直美, 杉山美香, 宮前史子：認知症予防の進め方. 真興交易（株）医書出版部, 東京, 2007
- 8) 呆け老人をかかえる家族の会編：痴呆の人の思い, 家族の思い